

1. 教育の責任

「歴史、文化、国際関係、言語など人類の営為が生み出したさまざまな文化的事象を教育研究の対象とし、文化についての深い洞察力と豊かな教養を身につけ、異文化に対しても広い視野をもって尊重し理解することのできる教養豊かな人材を養成する」という国際日本学部の教育目標をふまえて、日本と特に関わりの深い中国の歴史を中心としてアジアの歴史的事象を知ることによって、日本という国の歩んできた道を客観的に理解し、同時にまた多様な価値観があることを学び、「世界」と「日本」の両方を視野に入れたグローバルな人材の育成に努める。「東洋史の扉」（講義、東洋史・西洋史メジャー選択必修科目、春学期、2単位）「東洋史入門」（演習、東洋史・西洋史メジャー選択科目、春学期、2単位）「東洋近世近代史講義」（講義、東洋史・西洋史メジャー選択科目、春学期、2単位）「東洋史基礎演習」（講義、東洋史・西洋史メジャー選択科目、秋学期、2単位）「東洋史研究」（演習、東洋史・西洋史メジャー選択科目、秋学期、2単位）「東洋交流文化史」（講義、東洋史・西洋史メジャー選択科目、秋学期、2単位）「東洋史総合講義」（演習、東洋史・西洋史メジャー選択必修科目、秋学期、2単位）「フィールドスタディⅢ」（講義、経営学部開講科目、夏期集中講義、2単位のうち3コマ担当）「ゼミナールⅠ」（演習、コアカリキュラム科目、春学期、2単位）「ゼミナールⅡ」（演習、コアカリキュラム科目、秋学期、2単位）「卒業研究」（演習、コアカリキュラム科目、通年、4単位）「東洋史特殊研究Ⅰ」（講義、大学院科目、春学期、2単位）「東洋史特殊研究Ⅱ」（講義、大学院科目、秋学期、2単位）「比較文化特別研究（研究指導）」（演習、大学院科目、通年、4単位）

2. 教育の理念

「豊かな教養と専門的学術、旺盛な自己開発精神、優れた国際感覚および問題解決能力を備えた人材を育成する」という本学の教育理念に則り、有為な人材を社会に送り出すことが最も基本的な教育理念である。また、大学に籍を置く研究者として、自らの研究活動によって得たものを学生たちに伝え、そして自らがその立場上享受しえた事柄を社会に還元するのは当然の責務であると考え。具体的には、中国史を専門とする立場から、日本のルーツにかかわる歴史的背景としての「豊かな教養と専門的学術」を、そして自らのルーツを認識することから生まれる「旺盛な自己開発精神」を、さらには日本を含めた東アジアの多元的な歴史的な文脈を理解することにより「優れた国際感覚および問題解決能力」を、それぞれ育成することが教育上の理念である。

3. 教育の方法

上記「教育の理念」に照らして、歴史を教育する際に重視し、実践している主なことは以下の通りである。まず、「東洋史の扉」や「東洋近世近代史講義」などの概説的な講義では、中国の歴史を見る視点として漢族中心史観ではなく、北方遊牧民や、日本・朝鮮など周辺諸国をも含めてできるだけ客観的な立場から俯瞰する。特に近世以降では東アジアだけでなく地球規模で俯瞰する視点も取り入れている。次に「東洋交流文化史」ではインド発祥の仏教が中国へ伝わり、さらにそこから周辺地域へ伝播する様子を見ることによって歴史上、実際に起こった「異文化接触」「異文化受容」の具体的なありようについて理解を深める。このほか重視しているのは、「いま目の前に見えていること（＝現在の姿）」を無条件に当たり前のものとして受け入れるのではなく、その歴史的な由来、過去の姿を知り、そこから現在に至るまでの軌跡を具体的に知ることによって、「現在の姿」が持つ意味やそこに含まれる問題を認識する、ということである。たとえば「東洋史入門」「東洋史研究」では、中国史教育の一環として漢文を読み、漢字文化に慣れ親しむという趣旨の授業を行っている。そこでは当然、高校までの教育では習っていない漢字・漢語の知識に多く触れることになる。そこで学生に気づいて欲しいのは、高校までの教育内容には国によって「学習指導要領」という名前の「枠」がはめられている、言い換えると、これまで長い歴史の中で積み重ねられてきた膨大な「漢字世界」の中のごく一部だけを切り取って、小・中・高校で教えられてきた、ということである。以上のような観点の授業を受けることによって、学生にはより客観的で、枠にとらわれず、地球規模で物事を考えることができるようになることを期待している。

4. 教育の成果

たとえば「東洋史の扉」は1年次生向けの大人数講義であるが、自身が過去に中国各地を調査・旅行した際の写真なども提示しつ

ティーチング・ポートフォリオ

大学名：大手前大学 所属：国際日本学部 名前：山口 正晃 作成日：2026年1月28日

つ、万里長城など世界遺産を切り口として中国の歴史・文化を概説的に紹介・解説する講義であるが、授業アンケートの「全体としてこの授業をどう評価するか」という項目では平均値が 3.59/4 ということで、履修人数が 100 名を超える大人数講義としては、概ね学生から一定の評価を得ている。あるいは「東洋史総合講義」は 3 年次・4 年次生向けで受講人数も十数名と少なく、敦煌文献の写真を見ながら学生にその内容を解説させるというかなり難易度の高い演習科目であるが、授業アンケートの「全体としてこの授業をどう評価するか」という項目では平均値が 3.67/4 ということで、難易度の高さに関わらず一定の評価を得ている。実際、授業見学いただいた同僚の先生からも、授業の難易度が高いにもかかわらず、学生が主体的に集中して授業に参加し、また積極的に発言しており、教室内の雰囲気がとても良かったとの評価をいただいた。

5. 改善への努力と今後の目標

現在のところ、改善すべき問題として捉えているのは、いかにして教育の内容を学生に定着させるか、ということである。「タイパ」「コスパ」を重視する近年の学生は、とすれば「その場限り」の表面的な理解に終始し、十分に教育の成果が定着していないのではないかと思うことがしばしばある。定着のための最も分かりやすい方法は「反復」であるが、「タイパ」「コスパ」を重視する学生にとってこれはむしろ忌避材料となってしまう。目下のところ、この問題の解決の糸口は見えていないので、まずはその糸口を探し当てることが今後の目標である。

【添付資料】

1. 「東洋交流文化史」シラバス
2. 「東洋史研究」シラバス
3. 2024 年度「東洋史の扉」授業アンケート
4. 2024 年度「東洋史総合講義」授業アンケート